

SRU(Super Regional University)
=地域で学び地域のあらゆる
人々に学びの場を提供すると
ともに、世界標準の研究力に
よって地域と世界を繋ぎ、
地域と世界を変えることの
できる大学

ピックアップ
高知大学生

女子レスリング金メダリスト
櫻井 つぐみさん

金メダリストと
学長が語る
挑戦と地域の未来

高知大学学長
受田 浩之

2026年8月1日(土)・2日(日)

高知大学オープンキャンパス2026 開催

- 朝倉キャンパス** 8月1日(土)／人文社会科学部・理工学部
2日(日)／教育学部・地域協働学部
- 岡豊キャンパス** 8月2日(日)／医学部
- 物部キャンパス** 8月2日(日)／農林海洋科学部



詳細はこちら

参加申し込みや詳細は高知大学受験生サイトで7月初旬頃公開予定です。
本学に関心をお持ちの受験生や保護者の方はぜひチェックしてみてください！



合同進学説明会開催の日程

※日程や場所が変更となる場合があります。
詳しくは高知大学受験生サイト「進学相談会」ページからご確認ください。

- | | | | |
|----|-----------------------------|----|-----------------------------|
| 4月 | 8日(水) 高知/かるぽーと | 6月 | 9日(火) 徳島/あわぎんホール |
| | 22日(水) 高知/ザクラウンパレス高知/高知城ホール | | 10日(水) 高知/ザクラウンパレス高知/高知城ホール |
| | 24日(金) 香川/高松商工会議所 | | 17日(水) 高知/ちばさんセンター |
| | | | 18日(木) 愛媛/松山市コミュニティセンター |



もっと高知大学を知るために！

●動画で見る高知大学

「YouTube」・「夢ナビ」で学科紹介や講義動画を視聴できます。



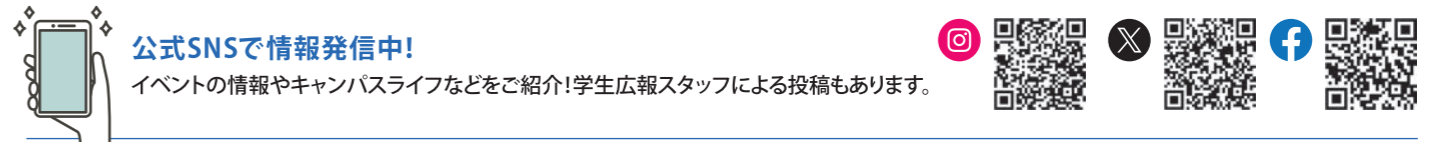
●デジタルパンフレット

大学のパンフレットや各学部のパンフレットを閲覧できます。



公式SNSで情報発信中!

イベントの情報やキャンパスライフなどをご紹介! 学生広報スタッフによる投稿もあります。



高知大学のラジオコーナー

FM 高知 81.6MHz 【毎月】
「Monthly 高知大学」 第4金曜日 10時15分～

放送中

高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届けしています。
ラジオ聴取用アプリ「radiko」をダウンロードしていただくと、スマホや
パソコンで全国どこでも視聴いただけます。 YouTubeで配信!



高知大学たんねる舎 ～いつまでも学びたい、を応援するラジオ～

この番組は、いつでもどこでも、いつまでも楽しく学び続けていきたい
皆さんを応援します。「たんねる」は幡多弁(土佐弁)で、「調べる」、
「探究する」、「訪れる」という意味。「たんねる舎」は、「知を探究し、
知を訪れる学びの場」という想いが込められています。

YouTube、Podcastで配信中!



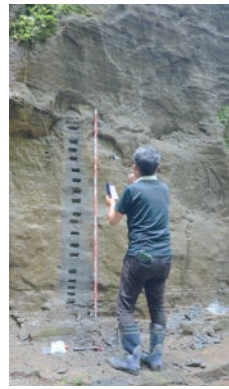
「高知大学マガジンSRU」アンケートご協力をお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から
抽選で3名の方に高知大学オリジナルグッズ
をプレゼントします。(当選者の発表は賞品の
発送をもってかえさせていただきます)

回答期限: 令和8年7月31日

こちらを
チェック





露頭の観察と堆積物試料の採取の様子
宮崎県えびの市

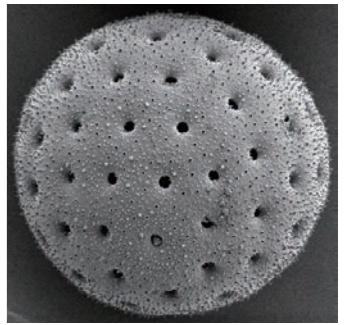


以前の寒冷で乾燥した時代には、モミヤツガといった針葉樹に、ブナなどの落葉広葉樹が混じる森林があったことが分かりました。さらにその後、シイやカシなどの花粉の化石が急速に多くなっていきます。これは気候が大きく移り変わったことを意味します。「ただ、他の研究者とともに、日本各地で花粉のほか、種実や葉の化石を丹念に調べると、寒冷で乾燥した時代でも、温暖で湿潤な気候が好きな植物が、現在の分布域で生き残っていたことが分かったんです。従来の考え方だと、気候が変動して寒い時代になると、北方系の植物が南下し、温暖種は



花粉を調べると 昔の植生や犯罪現場が 見えてくる!?

目に見えない微小な花粉。けれども、持っている情報は膨大で、過去の気候変動や犯罪の現場までも教えてくれるのだとか。花粉を研究している三宅尚准教授にその意外な魅力を聞きました。



これから力を入れるのは「法花粉学」
犯罪捜査に活かす「法花粉学」

三宅先生が最近、化石のほかに力を入れているのが「法花粉学」。自然科学の技術や知見を犯罪捜査に応用する「法科学」の一部です。「私たちはいろいろな植物に

南に逃げていったとされてきました。しかし、温暖種は寒冷期にも小さな集団で点在していた。そして、暖かくなったら、急激に勢力を拡大したと考えるのが「自然です」

植物化石から導き出された三宅先生らの考え方は、広く受け入れられるようになっていきます。森林だけでなく、人間の活動の歴史についても、花粉の化石は示してくれます。高知県の各地では約3千年前、縄文時代の末期の地層から栽培イネの花粉が発見されています。また、2千年前頃からアカマツの花粉が増え、これは森林が人間による焼き畑や伐採で失われたのち、栄養分の乏しい土地でも生育できるアカマツが増えたのだと考えられるそうです。

じつは、花粉の化石を専門に研究している大学は、全国でもほとんどありません。「日本では、花粉の化石を研究してきた系譜が3つほどあります。高知大学はその1つで、私は研究者として3代目にあたります」と三宅先生は明かします。

困まれて生活しているのが、犯罪現場で衣服や体に花粉が付着し、それが犯罪の証拠になる可能性があります。実際、海外では犯人が家に押し込んで強盗を働いたのち、逃げるときに生垣で咲いていた花の花粉が衣服に付着し、それが証拠として認められたといった例があります」

三宅先生は2026年度から、警察庁の附属機関である科学警察研究所と共同研究をスタート。花粉を使った新たな研究分野での成果が期待されています。今は研究室の学生とともに、高知市の都市公園に着目し、植栽されている植物や土壌表層に堆積した花粉のリストを作成中です。「身近にどんな植物がいて、どれだけ花粉をつくり、どれほど私たちの体や衣服、靴などに付着するのか。そういう基礎的なデータを集めています。都市公園では、犯罪が発生することも多い。あらかじめ調べておけば、何か事件が起こったときに役立つかもしれません」



ボーリング作業の様子
徳島県三好市黒沢湿原



濃集した花粉をスライドガラスに滴下しプレパラートを作成する様子



作成されたプレパラート

研究対象にしている植物の1つ、オシロイバナの花粉の走査型電子顕微鏡写真

花粉の化石とは、いったいどのようなものなのか。「花粉の大きさは20〜60μmくらい。1μmは千分の1mmですから、もちろん人間の目では見えません。こんなに小さいのに、外側の壁が非常に固く、しかも化学的に安定しています。この性質から、湖の底や湿地のように、酸素が少ないところに堆積した場合、固い外壁が化石として残るんです」

高知大学がある高知平野の場合、もとは低湿地だったため、地層に花粉の化石がよく残っているそうです。採取の方法の1つは、柱状の管を地面に突き刺していくボーリング。過去の断層活動などが原因で地層が露出している場合も狙い目です。なかでも三宅先生が探するのは、有機物が多く含まれている黒い土。こういった土を採取すると、花粉の化石が見つかりやすいといえます。

現場から土を研究室に持ち帰ったら、花粉を取り出す作業に入ります。「余分なものがある混じっているから、強い酸やアルカリを使って、花粉以外の有機物を溶かします。比重の違いを利用して、鉱物質を取り除く方法もあります。主に花粉だけが残ったら、プレパラートにして、顕微鏡で見て、何の花粉なのかを調べます」

森林の変遷や稲作の時期も 花粉の化石が教えてくれる



花粉の化石を調べることによって、何がわかるのでしょうか。「花粉は多様な姿や形をしているので、顕微鏡で観察すれば、何の花粉なのか判別するのが可能です。そこから採取した土壌が地表にあった当時、どんな植物が生えていたのか分かり、当時の気候環境を推理することもできます」

三宅先生が高知大学に着任してから30年近く。この間の研究で、高知平野の丘陵地にある森林の変遷が明らかになりました。今広がっているのは、シイやカシなどの照葉樹林。厚くて光沢のある葉の常緑広葉樹の森で、温暖で雨の多いところに発達します。ところが、花粉の化石を調べると、1万年前

なかでも三宅先生が注目しているのが、ツツジ科のサツキ。ツツジ科の花粉は大きくて、しかもネバネバした糸がついているので、触れると数千もの花粉が付着します。サツキの花粉を主に調べているのは、研究室の学生。犯罪捜査に興味を抱いて、三宅先生の研究室に入り、将来は科学警察研究所や全国の警察に設置された科学捜査研究所に就職するのが目標だそうです。

「日本には花粉に関する非常にたくさんの情報があります。しかし、それぞれの研究者が独自に取り組んでいるので、せっかくの貴重な情報が1つにまとまっていない。それらの知見を集めてデータベース化し、法科学者が利用しやすい状態にする。これが今後の重要な仕事だと考えています」と三宅先生は力を込めて語ります。

●衣服に付いた花粉を調べる実験例



綿糸に付着したサツキ花粉の走査型電子顕微鏡写真

サツキの花

理工学部
生物科学科 准教授

三宅 尚

兵庫県出身。高知大学理学部(現・理工学部)卒業。広島大学大学院生物圏科学研究科博士後期課程(中途退学)。博士(学術)。1997年、高知大学理学部に着任。古生態学と花粉学が専門。近年は法花粉学にも力を入れている。「研究のフィールドは高知県だけではなく、長野県などに出かけ花粉の化石を調べる学生もいます」

生物科学科
植物生態学研究室
三宅先生のHP▶



体を動かすと人はこんなに変わる! 運動が持つ力の秘密を探る

研究テーマの原点は中学生の時の体験から

地域協働学部の佐藤文音講師は、運動が高齢者の健康状態にどんな変化をもたらすのかを研究。病院や地域の現場に入り、参加者と一緒に体を動かしながらデータを集める。そんな実践と研究を融合させた独自のスタイルで、健康づくりの新しい可能性を探っています。



運動教室
やりました!

健康で長生きをサポートしたい

地域協働学部3年
よしとのかのん
吉本 奏音 さん

高齢者の健康増進のサポートに興味があって、学びになればと参加しました。祖父母がいるので、教室の内容を教えてあげたいと思います。今回は筋トレを指導させてもらいましたが、スクエアステップの指導員の資格を取って、そちらも指導できるようになりたいです。

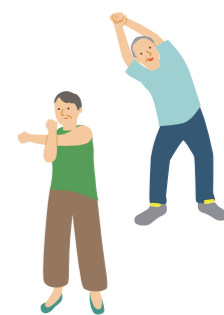


健康づくりの役に立ちたい。そんな佐藤先生の思いが現れた活動のひとつが、地域からの求めに応じて開く運動教室です。2回にわたっての町で行われた運動教室では、有志の学生2人が指導役を務めました。集まった参加者を前に、ひとりが手本を見せながらプログラムを進行。もうひとり

地域の運動教室では学生がインストラクターに

「現場に行くと地域の方に参加していただき、運動教室のような実践の場を作って検証するのが私の研究手法です」と佐藤先生。運動教室では佐藤先生も参加者と一緒に体を動かし、声をかけながら運動プログラムを進めます。「研究は自分自身のためだけに行うのではなく、運動の場のような形で地域の方に活用してもらいたいと思っています。私の研究手法はひとりでは実践できず、調査協力者や関係する様々な地域の皆さん、学生にも協力してもらわなければ成立しません。最終的には研究の知見も、情報発信のような形で社会に還元し、地域の皆さんの健康づくりに少しでも役立つような方向で活動したいと考えています」

「現場に行くと地域の方に参加していただき、運動教室のような実践の場を作って検証するのが私の研究手法です」と佐藤先生。運動教室では佐藤先生も参加者と一緒に体を動かし、声をかけながら運動プログラムを進めます。「研究は自分自身のためだけに行うのではなく、運動の場のような形で地域の方に活用してもらいたいと思っています。私の研究手法はひとりでは実践できず、調査協力者や関係する様々な地域の皆さん、学生にも協力してもらわなければ成立しません。最終的には研究の知見も、情報発信のような形で社会に還元し、地域の皆さんの健康づくりに少しでも役立つような方向で活動したいと考えています」



「わたった帰りで道ではスキップしてたんです」と先生は笑います。その劇的な変化に「体を動かすことで、こんなに気持ちが変わるんだ」と驚き、その力を「踊りの力」と呼んだといいます。「踊りで心も体も一気に変わります。これを医療や福祉に活かさないかなと思えました」

研究者になったのは、実践の裏側にある理由を知りたかったからだといいます。「どうして変化が起きるのか、どんなかわり方が効果を生むのかに興味があるんです。実践と研究が同時にできる大学教員を目指しました。今は踊りも含め、もう少し広く体を動かすことで人がどう変化するかに焦点を当てた研究をしています」

様々な人たちの協力の下で地域とともに進める研究

佐藤先生が現在、取り組んでいる研究テーマは、高齢者が即興的・創造的に体を動かすことで、認知機能にどんな変化が起るのか。創造的な動きとは、決められた動きを真似するのではなく、テーマだけを与えるスライルの運動です。「運動の実践方法によって認知機能への効果に違いがあるかなど十分に検討されていない事があります。人に言われた動きをするのではなく、自分で考えて動くことに、認知機能を刺激する要素があるのではないかと考え、科研の研究課題として検証を進めています」

県内の南国市という町の2か所が高齢者から調査協力者を募り、地域の施設で運動教室を開催して、運動の前後に認知機能を測定。この町では10週間の継続プログラム、南国市では1回の短時間プログラムと、異なる条件で効果を検証しました。

の学生と佐藤先生が参加者の間を巡りながら声をかけたり、危なくないよう手を添えたりしてサポートします。体操やストレッチに続いて、佐藤先生の恩師が考案した升目が描かれたマットの上を歩くエクササイズ「スクエアステップ」も実施。参加者も楽しそうでした。さらに筋トレを行って、教室を終りました。

参加者に感想をお聞きすると、「最近、体の動きが鈍くなったので参加しました。ちょっとした運動量だったし、非常に気持ちいい時間が過ごせました」と野村さん。また、川上さんは「学生さんとも交流できてとても楽しかった。町内でこのようなプログラムに参加できて、いい体験になりました」と話してくれました。

教室の終了後は、佐藤先生が運動教室での声のかけ方や手本の見せ方などを学生にアドバイス。学生にとって、とてもいい学びの機会になっています。

「運動教室の参加者に笑顔になってもらえることは、研究や実践のモチベーションであり、やっぱり体を動かす事で、人の健康状態はポジティブな方向に向かうんだな」と原点に帰れることも力になります。今後は運動が交流促進にどのような影響を与えるか、研究したいと思っています」

次はもっと上手に教えられるように

地域協働学部3年
いしいゆずな
石井 柚名 さん

プログラムは2人で考えて、通し稽古をして臨みました。次はもっとうまくできるかなと思っています。佐藤先生は普段、話しやすくして気さくなのですが、このような場では細かいところまで見てくれて、気づけなかったところも指摘してくれる、メリハリのある先生です。



体を動かすと気持ちも明るくなります。



スクエアステップ



地域協働学部
地域協働学 講師

佐藤 文音

東京都出身。日本女子体育大学体育学部卒業。お茶の水大学大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程、博士(体育学)。2018年、高知大学に着任。「研究では、学生たちにもものすごく協力してもらっています。実践のやり方や論文の書き方を伝えることで、若い人たちに研究を身近に感じてもらうらと思っています」



活躍する高知大学の先輩に
会いにいきました!

HELLO! SENPAL

Vol.10

人文学部(現・人文社会科学部)卒
馬路村農協同組合 組合長

長野 桃太さん

ゆずの村の未来を探る。
全国最年少クラス、
若き組合長の挑戦!

学びの自由さに驚き、 サッカーに熱中した学生時代

高知県東部の山あい位置する馬路村。人口約750人の小さな村ながら、ゆず加工品で全国的に知られ、地域づくりの先進事例として注目されてきました。その中心的役割を担うのが馬路村農協です。2025年、その農協のトップである組合長に、38歳という若さで就任した長野桃太さん。村の未来を描き、事業を統括し、地域の声を受けとめながら舵を取る。その責任は大きく、同時にやりがいも満ちています。インタビューではまず、高知大学で何を学んだのかお聞きしました。

私は高知市出身なので、「地元愛」というか、県内に残りたいという思いが高知大学に進学した一番の理由でした。大学受験の面接のとき、高知県でもグリーンツーリズムの振興を図ると面白いのでは、といった話をしたことを覚えています。人文学部

村おこしの先進事例として全国的に知られていて、取組がずば抜けている。ここならば楽しく働けそうだなと思えました。当時、馬路村農協は伸び盛りの時期。30名近い応募があったなか、運良く採用されました。同級生には「なんで、そんな田舎に行くの?」などと言われましたが、僕にしてみたら最先端のところに就職したつもりです。

実際に働く前に、「ちょっと手伝いに来て」と言われて参加した。盛大な「ゆずはじまる祭り」のことは強烈に印象に残っています。右も左も分からないのに、「ほんなら、ここを任せるとき」と、ユズ玉を川に流して順番を競う「ゆず玉レース」というイベントの担当にされたんです。本当に衝撃を受けて、すごく自由度の高い職場だなと思いました。

2009年に馬路村へ移住した長野さん。最初に配属されたのはデザイン兼販売の部署。前任者が退職したため、デザイン未経験のまま、業務を任せられました。

(現・人文社会科学部)では、地域社会学を中心に学びました。特にゼミの合宿形式で地域社会を体験しながら学ぶフィールドワークが印象に残っています。学びって自由なんだなあ、と思いました。

課外活動はサッカー部に所属していましたが、全国大会に出場する強豪チームで、2学年後輩の實藤君はいまもプロ選手として頑張っています。自分もサッカー部では、誰よりも遅くまで練習していました。こうした経験のおかげで、努力はすごく大事だなと実感しました。満足したら成長が止まる。いい意味で、不満足であれど。僕は「不満主義」と言ってるんです。働くうえでも大切なことだと思っています。

マニュアルがない農協で、 自分で道を切り拓く

就職活動を始めたのは大学3年の終わり頃。高知県内で地域に関わる仕事を

も、組織の上層部が厳しくチェックするのではなく、基本的には好きなようにやらせてもらっていました。

デザインだけでなく販売も同じですが、馬路村農協で一番大事なのは考え方をいかに伝えていくか。単純な「物売り」ではなく、まずは村のメッセージをしっかり伝える。それがお客様の共感を生んで、買ってもらえるのだと学びました。



その後、製造部門、販売部門、コールセンター、荷作りなど、農協販売事業のほぼすべての業務を経験。2015年には販売課長に就任し、販路開拓や企画を牽引しました。馬路村農協は先駆者として走ってきたので、事業にマニュアルがないんです。自分たちで考えて、目の前の壁を上っていく。霧の中をかき分けながら、自分たちの



(上)組合に入ったばかりの頃。写真左端が長野さん。(下)ご家族との写真。

ながのもちた
長野 桃太さん

高知市出身。人文学部社会経済学科卒業。2009年に馬路村農協へ就職し、デザイン・製造・販売など幅広い業務を経験。2015年に販売課長、2025年に組合長に就任。3児の父。妻は高知大学の同級生。「馬路村は第二の故郷というよりも、第一の故郷に限りなく近いかな。ここで働けて本当に幸せです」



馬路村農協同組合HP



ゆずとハチミツをつかった馬路村公認飲料。発売から36年を迎えた高知県民に馴染みのある商品。

道を作っていくという感じでした。大変でしたが、その経験が今の自分をつくってくれたと思います。

移住後には、村の人たちが温かく迎えてくれたことも大きな支えになりました。玄関先に料理が置かれていたり、声をかけてくれたり。僕が信条にしているのは「誰が為に」という言葉。自分のためではなく、誰のために頑張るのか。馬路村にいると、何人もの村の人の顔が浮かぶから頑張れるし、やりがいにもつながっています。

38歳で組合長に就任 若さを武器に、村の未来を描く

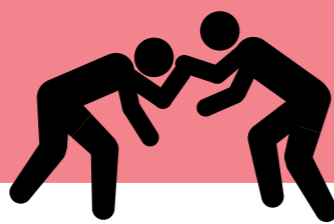
長野さんは2025年、38歳で組合長に就任。全国でも最年少クラスの若さです。馬路村農協は、ゆず加工品で30億円の売上を誇る一方、次のステージに進む時期にきています。

20年くらい前に馬路村農協がすごく盛り上がった時期がありました。いまは安定期に入っていますが、また盛り上げないといけない。「お前が組合長をやれ」と言われなくても、「僕がやります」と自分から言ったと思います。30代の組合長って、キャッチーでしょう。自分自身も売り物にして広報戦略をしていこう、と思っています。今後は新しい取組として、外貨に頼らない村づくりをしたい。独居高齢者のために冷凍食品を



馬路村の「第2章に」取り組みます!

HELLO! SENPAI



ピックアップ 高知大学生



怖がらないで、挑戦する 気持ちを大切に

2024年パリオリンピックの女子レスリング57kg級に出場し、見事に金メダルを獲得した櫻井つぐみさん(高知県香南市出身)は、2025年4月から高知大学大学院で学んでいます。今号では、受田浩之学長と特別対談。大学院での学びから学生へのメッセージまで、たっぷり語り合いました。

スポーツで地域貢献したい。 その思いから大学院に進学

受田 櫻井さん、高知大学大学院に入学するきっかけは何だったんですか。

出てきました。勉強が楽しいと思えるようになってきたのは、自分が成長した部分だと思えます。芸術を専門にしている方とも一緒に授業を受けているので、新しい発見もあります。多くのことを学べて、自分の未来が少しずつ現実的に見えるようになったのがすごく良かった。今後も学ぶうちに、良かったと思う気持ちがあります。強くなるんだと思います。

受田 私が高知大学に来てから、34年ほどたちました。人生の半分を高知で育てていただきました。最初に農学部に着任して思ったのは、高知の自然はここにも負けないということ。人や地域そのものの、歴史の持つ魅力も素晴らしい。この本日に恵



櫻井 オリンピックが終わってから、今後どうするかを考えて、大学院で学び直したいと思えました。いろいろ調べたなかで、高知大学大学院にスポーツ・芸術文化共創専攻があるのを知り、自分が今後やりたいことに合っていると思うので進学しました。スポーツによる地域貢献という私の思う方向性と重なっている部分もあり、学びを活かせると感じています。

受田 大学や大学院には、様々なバックグラウンドを持つ同級生や先輩がいて、とても「こちゃこちゃ」しています。言い換えれば「多様」という表現になるでしょう。そんななかで、偶発的にいろいろなものに遭遇していく。自分の考えだけでは想像がつかないものに触れ、心が越境し、新しい発見に導かれる。これが大学、大学院の魅力です。櫻井さんのように自分の世界を追求し、世界一になった人が、どのような偶然に感動し、これからの人生に活かしているのが楽しみです。

櫻井 オリンピックが終わってからも、最高の感激は忘れられない。

受田 高知大学の前身である旧制高知高校の初代校長、江部淳夫(えべあつお)先生の言葉に「感激あれ若人よ、感激なき人は空虚なり」があります。この言葉は「汝らが前に、高く高く理想を掲げよ。さすれば、道は坦々として汝らが前に開けん。ただ歩めば至る」と続きます。まさに、櫻井さんが歩んできた道のりそのものではないでしょうか。これまでに最も感激したのは、やはりオリンピックで金メダルを取ったときですか。

櫻井 はい。最近、講演をするときなど、その決勝の動画を紹介することがあるのですが、何回見ても鳥肌が立ちます。自分がうれしかったのもそうですが、父や大学の監督の先生も見たいことがないほど喜んでくれて。それまでの本心にきつかった全部のことが、良かったことに変わ

受田 私の息抜きは、本を読むか歩き回っているかですね。最近時間はあれば、積極的にウォーキングをしています。時速6キロほどで2〜3時間歩くこともあるんですよ。講演の組み立てなど、いろいろと考え事をしながら歩き、いいアイデアが浮かんだらスマホに録音したり、文字を打ち込んだりもします。ある意味、自分と向き合う時間にもなっています。

櫻井 この季節は、新しいことに臨む時期だと思います。不安な要素も多いですが、怖がらずにどんどん挑戦する気持ちを大切にしたい。挑戦してみたら、以前の自分と比べて成長したと絶対に思えるはずですよ。

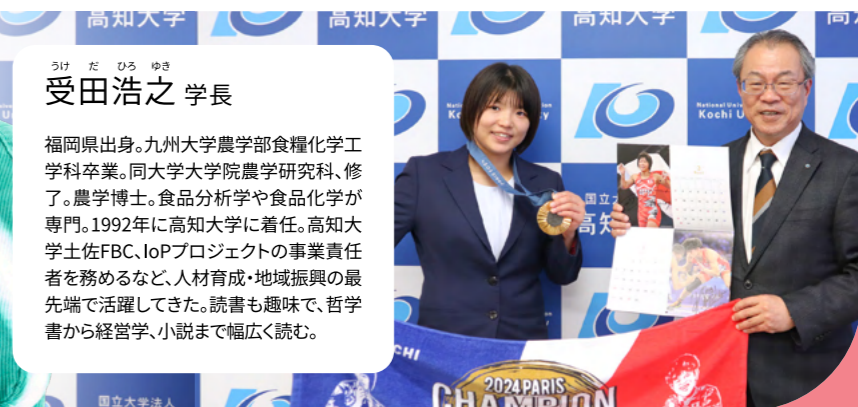
特別対談 金メダリストと 学長が語る 挑戦と地域の未来

高知大学学長
受田浩之

スポーツ・芸術文化共創
専攻2年
櫻井つぐみさん

なく、できるだけ多くの人と話をし、そして、自分の価値観があまりにも限られていたことを思い知り、いままでも知らなかった世界に強く影響を受けてほしい。高知大学は地域で最も規模の大きな大学なので、そのスケールメリットを最大に活かさない手はない。600人近くいる教員とも話をしてほしいですね。自分の方向性を探っていくとき、教員ほど頼りになる存在はいませんよ。

受田 私、私も新入生に向けてメッセージを送ります。まず、大学では同級生だけでは



うけだ ひろゆき
受田浩之 学長

福岡県出身。九州大学農学部食糧化学工学科卒業。同大学大学院農学研究所、修士。農学博士。食品分析学や食品化学が専門。1992年に高知大学に着任。高知大学土佐FBC、IoTプロジェクトの事業責任者を務めるなど、人材育成・地域振興の最先端で活躍してきた。読書も趣味で、哲学書から経営学、小説まで幅広く読む。

さくらい つぐみ
櫻井つぐみさん

高知県出身。父が開いたレスリングクラブで、3歳からレスリングを始める。2020年に育英大学に進学し、世界選手権3連覇。2024年から育英大学助手。パリオリンピックの57kg級で金メダル獲得。2025年4月、高知大学大学院スポーツ・芸術文化共創専攻に進学。あいみよんの大ファン。



2025年度高知大学フォトコンテスト入賞作品

2025年度高知大学フォトコンテストの入賞作品を決定しました。今回のコンテストでは、89名から152作品の応募がありました。学内選考委員、学長、理事(広報担当)、広報・校友課による審査の結果、5作品が入賞となりました。

募集テーマ:「たまるか!高知大学!~毎日のキャンパスにドラマがある~」
募集期間:令和7年12月22日(月)~令和8年1月21日(水)
応募対象:高知大学生、卒業生、役員、教職員、元役員、元教職員(非常勤職員・派遣職員も含む)



銀賞

あんたらが来たら楽しいがよ
撮影者:寺下 憲一郎
高齢者看護学実習で何うデイサービスにて、学生が来るのを心待ちにしている利用者さんとの触れ合いの様子



銅賞

とびだせ!子牛の大冒険!
撮影者:とろろ文鳥
子牛のお散歩中。生後27kg→70kgに成長し、職員を引っ張る勢いで駆け回る様子を撮影しました。



金賞

高知から世界へ 内視鏡技術の発信
撮影者:宮地 英行

ブラジルで内視鏡の指導と実演。高知大の技術と情熱が国境を越え、人と人がつながる瞬間

銅賞

ひょっこりフクロウ
撮影者:たけ
夕方の朝倉キャンパスグラウンド横にて。数日前から姿を見せており、愛らしい姿で毎日癒してくれました。



りぐっちゅうで賞

高知大学の、まんなかで。
撮影者:山崎 綾
私の考える高知大学の真ん中であるロータリーで、高知大学が世界の中心であるような構図にしました。



自然科学系理工学部門の原忠教授らの「蛇籠技術」が政府国際広報動画で紹介されました

高知大学では世界的な防災・減災に貢献する研究に取り組んでおり、この度、原教授が研究を主導してきた「蛇籠技術」が、内閣府大臣官房政府広報室の海外向け広報活動の一環として取り上げられました。

原教授は、「日本は長い歴史の中で、豪雨や地震などの自然災害と向き合いながら防災・減災の知恵と技術を積み重ねてきました。私たちが取り組んでいる「蛇籠技術」は長い歴史を持ち、河川護岸や斜面を守るための経済的で地球環境にやさしい工法です。近年、世界各地で災害が増えており、日本で培われた経験や土木技術が国際社会の安全に役立つ場面はますます広がっています。この動画を通じて、私たちの研究が世界の防災・減災に貢献するすきかけになれば嬉しく思います。」と語っています。総理官邸公式YouTubeチャンネルで公開されています。ぜひご視聴ください。



動画はこちら

ロングVer.



ショートVer.



高知大学医学部総合防災訓練を実施しました

令和7年12月5日(金)、高知大学医学部総合防災訓練を実施しました。今回の訓練は、「南海トラフ巨大地震」が平日の昼間に発生し、多くの患者さんが来院中という状況を想定し、発災から1時間までの初動訓練として、病院内の主なセクションに患者を患者役・家族役として配置して初期対応を行いました。また、本部訓練では、災害対策本部・災害医療本部・学生災害対策室・ボランティアセンターを発災後に立ち上げ、立ち上げに要する時間や本部での各班や本部員の連携対応を確認しました。実動訓練後は、DMAT隊員による訓練の振り返りを各セクションで行い、全体の報告会で改善すべき点等の情報を共有しました。

【訓練概要】

- 主な訓練セクション(総合受付、各外来、病棟の一部、手術部、検査部、放射線部、黒エリア)患者役・家族役を配置し、患者の安全確保、診療判断、一時避難先への誘導等の初動訓練を確認。但し、黒エリアについては、立ち上げ後訓練として実施。
- 本部訓練(災害対策本部・災害医療本部、学生災害対策室・ボランティアセンター)発災の放送後、参集し、設営・チームビルディングを行い、電子黒板を用いて、被害状況報告の集約や要請のあるセクションへの資料搬送やボランティア要員の派遣依頼等を実施。



「高知大学みらい基金」が始動!

令和7年12月に、これまで全学基金として歩んできた「さきがけ志金」「修学支援基金」「国際交流基金」を統合し、新たに誕生した基金です。高知大学の「みらい」をともに支える一歩として、どうかご支援をお願いいたします。

みらい基金の特徴は、学生団体や研究者・プロジェクト単位で募金ページを設けている点です。どんな学生・研究者を支援するのかを、寄付される方ご自身にお選びいただけます。また、学生・研究者との接点を創出し、活動の様子や成果をお届けすることで、「寄付してよかった」と実感していただけることを目指しています。



みらい基金では、大きく3つのカテゴリにご寄付いただけます。

大学生の“みらい”を応援

挑戦へ。成長へ。学生生活の充実に、あなたのご支援を。

経済的理由により修学が困難な学生への支援や、世界で活躍できる人材を育成するための留学費用の支援など、学生一人ひとりの学びと挑戦を後押しします。



研究者の“みらい”を応援

発見へ。革新へ。知の創造に、あなたのご支援を。

先端研究から地域課題にアプローチする研究まで、多様な研究プロジェクトや研究者への支援を通じて、新たな知の創出と地域・社会への貢献につなげます。

高知大学の“みらい”への挑戦を応援

発展へ。継承へ。学びの場の充実に、あなたのご支援を。

本学が、学生一人ひとりの可能性を育み、社会に貢献する人材を育てるという使命を果たし続けるため、教育研究環境の整備など大学運営全般に大切に活用させていただきます。



詳しくはこちらから



ネーミングライツパートナーを募集します

高知大学では、教育研究環境の向上と、地域・社会との連携強化を目的として、ネーミングライツ事業を開始いたしました。この事業は、本学が所有する施設等に愛称を付けていただくことで、大学と企業・地域がともに発展できる新たな取組です。ネーミングライツパートナーとなっていただくことで、本学の学生や教職員をはじめ、多くの利用者の目に自然と触れる機会が生まれ、リクルート活動の促進や産学連携、社会貢献の推進にもつながります。本学における教育・研究活動の発展を支えるパートナーとして、ぜひ本事業へのご参加をご検討ください。

- 【ネーミングライツ募集対象施設】
- ・学術情報基盤図書館(中央館)
 - ・6階メディアホール
 - ・学術情報基盤図書館(中央館)
 - ・2階アクティブラーニングスペース
 - ・共通教育210番教室

詳細は高知大学ネーミングライツ事業のページをご覧ください。



農林海洋科学部の学生4名が、農林水産省主催の「第2回みどり戦略学生チャレンジ」において、AgVenture Lab賞を受賞しました

第2回みどり戦略学生チャレンジ全国大会において、農林海洋科学部4年の弥益琴子さん、渡邊穂夏さん、真野弥悠さん、土居咲穂さんのグループがAgVenture Lab賞を受賞しました。

本大会は、農業大学校や農業高校を含む大学生・高校生などを対象に、個人またはグループで「みどりの食料システム戦略」に基づいた活動に取り組み、その成果を発信・共有することを目的として農林水産省が開催しています。第2回大会では、高校の部と大学・専門学校の部あわせて387件の応募があり、部門毎に各賞1件ずつ選定されました。

本グループは、「気候変動に対応した夏季栽培の暑熱対策に関する取組」の内容で応募し、農林水産省内外の専門家で構成される審査委員による審査を経て、特に優れた取組として本賞を受賞しました。

